



天野進吾が視る。語る。今日のできごと。まつりごと。

座して衰退を見るに憚りず。
今こそ温厚な静岡市民も
立ち上がる時。

「屡々、私の周辺で聞こえてくる言葉の端々に今日の市行政に対する厳しい批判があります。」

勿論、関わりを持つ立場の私ゆえの市民の感情も少なくなく、その点十分に斟酌しなければなりません。これほどの不満の蓄積は過去にはなかったものと思います。

以前、このスコープの15号で特集しましたが、例えば大谷に計画された超大型量販店「イオン」の進出に対する市当局の不明朗な動きは商業者のみならず多くの市民に不安を与えました。そこには計り知れない思惑が混在していたと考えられます。

殊に近年、対民間企業との関わりの中で、市職員の発想としては決して生まれ得ない怪しげな施策が実行されているのです。

本日は具体的に披瀝することは差し控えますが、事情を知る方々の愁眉が消えることはありません。例えば石田に誕生したセントラルスクエアと区役所を結ぶ不可解な陸橋、オープン時の競輪駐車場の貸与、11月の大道芸開催の際の特別な配慮など「トコトン」企業側に愛想のいい対応は駅南商店主の悲しい疑問でありました。この一事を見ても市民の不安を察することは容易でありましょう。

欺瞞なり「美術館」の建設

さて過日、駅前再開発の一件が新聞に大きく報道されておりました。その中に国

と市であわせて70億円の補助金を出す計画に多くの市民から疑問の声を聞いてきました。勿論、市街地再開発事業に伴う補助金の多寡によるものでありますからその金額の多寡については云々できるものではありませんが、総事業費199億円に対し国と市で70億円を補助することには些か驚く処であります。

一方、完成後にはこの25階建てのビルのワンフロアを本市は実に30億円(予定)で買い取って市立美術館の設置が企画されております。これもまた極めて頓狂な発想といわざるを得ないのであります。

私達は「美術館」と名乗る以上、それなりの美術品を自ら所蔵し、それを常時展示している建物と想像致します。本市のように一切の収蔵品を持たずして、貸館だけを対象とする施設は通常「ギャラリー」と呼んでおり、間違つても「美術館」との名称は避けて頂きたいと存じます。

さて、この際、批判ばかりでは失礼ですので敢えて私の奇策を提案してみたいと存じます。

奇策一 ポーラ美術館のプランチに

数年前、箱根に印象派美術の粹を集めた「ポーラ」美術館が誕生しました。ご案内のように、ポーラ化粧品本舗の収蔵品はそのグレードについて日本の如何なる美術館にも引けを取らない驚くべき内容を持つものであります。

そのポーラ化粧品品の所持する美術品が初めて日本人の目に触れたのが、平成元年の「駿府博」の会場でした。それまでポールの美術品は一度として社外に展示され

ることはありませんでした。

当時、「駿府博」の期限が迫る中で予定されていなかった企画を実行するために私達は官民揚げての積極的な招致運動を展開してまいりました。その結果、遂にポーラ化粧品品の故鈴木常司社長の「どうぞ、どんな希望にもお答えします」の將に清水の舞台から飛び下りる程の決断があつて駿府公園に印象派の美術館が実現したのであります。そこには明らかに社長の胸中には「ポーラ化粧品が水落町に誕生した」という郷土意識が潜んでいたのであります。

さて私が提案する企画とは再開発ビルから買取するフロアをポーラ美術館のプランチとする、即ち、展示されずに倉庫に保管されている沢山の美術品を常時、この駅前の仮称「静岡市立ポーラ美術館」で展示する施設としたら如何でしょうか。

勿論、これを実現するには容易な努力ではありませんが、建築設計もこれからの現在、ポーラ化粧品本舗の発祥の地であり、そのことを顕彰する施設として、美術館の建設に協力願いたいと官民揚げての誘致運動があれば決して不可能な話ではないと存じます。

今こそ「発想と行動の転換」を

蛇足になりますが、冒頭申し上げました通り最近の市政に対する市民の不満はわが国経済の混迷から来る部分も少なくはありませんが、多くは今日の市政が「見えない」ことへのフラストレーションであります。財政の厳しい時は將に「発想の転換」から街づくりは始まりますこと肝に銘じて頑張つて頂きたいと存じます。

文責 天野進吾

珍名「弥勒一・二丁目」について

本市の町名の中でも「弥勒」の名前の出典は中々思い浮かばないでしょう。市内に点在する職業を明示する町名(呉服、大鋸など)でもなく、漢字の持つ語感(錦、幸など)でもなく、ましてや仏教寺院のひしめく地域でもないのに、「弥勒菩薩」を連想するこの町名は以前から奇異にも感じてまいりました。

この町弥勒一・二丁目は嘗て安倍川越えで駿府を訪れた人々にとっては最初の町となります。それゆえに故事来歴の記念碑がいくつもありますので後程記載して参ります。

町名の由来

まずは町名の由来から、三代將軍、徳川家光の逝去を契機として由井正雪の乱、通称「慶安の変」が起きた不穏な時代、山伏で弥勒院と名乗る男がこの界隈に住んでおりました。その男が後に還俗*して源右衛門と名乗り、安倍川の川岸で餅を売り始めましたが、これが「安倍川もち」の起源と言われております。その際、弥勒院の名をとって「弥勒茶屋」と名付け、後にその周辺を正式に「弥勒」と命名されたとのことです。

正念寺について

さて、その慶安の変が未遂に終わり、由井正雪以下逆臣たちは梅屋旅館で斬殺され、その遺体は安倍川の河原に捨て置かれていました(この点は静岡の歴史②で詳細に記述)。後に江戸で正雪に世話になった二人の娘の願いを聞き入れた正念寺の住職が「十三佛」として弔ってききましたが明治になって正

念寺が廃寺、今、横内町の来迎院が代わってお祀りしております。今、弥勒公園には「由井正雪公之墓跡」の碑がありますが、恐らくそこが正念寺の跡地でしょう。

安倍川義夫の碑

時は移って將軍吉宗の時代。紀州の漁師が、預かった80両もの大金の入った財布を、安倍川を渡る際誤って河原に落としてしまいました。その後、財布を拾った川越人夫は旅人の後を追って宇津の谷峠まで追いかけて漸く財布を渡しました。喜

一寸一言

私の雑記帳から

一升酒は飲めても、一升水は何故飲めない

小学生時代のある夏の日、喉が渇いた私は台所に立って不図思いついた、一体水はどの位飲めるものか考え、そして素直に挑戦してみました。当時の家庭には米を量る五合枡

(GOON)が必ずありました。

この枡に私は手押しポンプから慎重に水を注ぎ、おもむるに口に運びました。この時、飲み干すまでには意外に時間がかかりましたが、何とか枡を空にすることが出来ました。

枡を口から離し、それを流し場において時、急に吐き気を催したのであります。そして直ぐに私は自分の行動に結論を出しました、即ち「牛飲馬食」の真似は二度とやらない事……

んだ旅人は金子を包み人夫に差し出したところこれを拒否、仕方なく旅人は町奉行に仲介を求めました、その結果「大岡裁き」と同様礼金は旅人に返され、人夫にはその行為を褒めて奉行から褒美が出されたのでした。この話は白隠禪師の著書にあり、昭和四年、県、市、郡の教育委員会によってその行為を顕彰すべく「安倍川義夫」の石碑が建てられました。

安倍川会所跡

また弥勒の交番の前に「安倍川会所跡」の説明板があります。これは当時の川越に関わる人夫の手配や川越賃料などの仕事をやる人の会所跡です。いずれにせよこの界隈は豊かな歴史が埋もれているところですので一度散歩しては如何でしょう。

*還俗とは一度、出家して、再び俗人にかえること。

さて宴会や酒席にあつて「割り勘」要員の私の目にもどうしてあんなにビールが飲めるのか不思議でなりません。水であれ酒であれ胃袋に貯まる量は同じ、にも拘らず何本ものビールを空ける芸当は何処から生まれるのか不思議です。

実は、水は殆どが小腸で吸収され、胃袋では貯蔵されるだけです、ところが酒類はアルコールが胃で吸収される際、水分も一緒に吸収されてしまう、だから膨大な量のビールも「呑み助」の胃袋から吸収され、その結果牛飲の真似ができるのです。ところで余談ながら私は下戸、60余年の人生のなかでこれまで飲んだ酒類は合計ビール2本にもなりません。このままでは一生に「一升」も飲まずに終わるでしょう。



彩時記

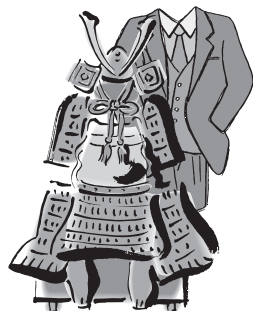
鎧兜とビジネススーツ。

五月五日は端午の節句。もともとは悪鬼や災厄を祓うのが目的で、武家屋敷の塀や門に柵を作り、幟(のぼり)や兜・槍・なぎなた等を並べる外飾りでしたが、やがて室内に鎧兜を着せた武者人形を飾るようになりました。

鎧兜が現在の形で飾られるようになったのは、戦後になってから。鎧兜は古くから命を守る象徴とされ、男の子を事故や災害から守る縁起のいいものとして、端午の節句のメインの飾りになりました。

歴史に残る武將たちの鎧兜は、国宝やご神体として各地の神社仏閣で奉られています。重厚感と風格が漂う鎧兜は観賞用としても見ごたえがあり、戦国武將たちの男のロマンや強さに心ひかれるファンも多いようです。

時は移り、男性たちの戦闘服?は鎧兜からビジネススーツへと姿を変えました。戦う相手、身にまとうものは変わっても、家族や仲間を守るために戦うぞ!という勇ましい気持ちは同じかもしれません。



歴史講座のお知らせ

町内会の集會、サークル活動などに天野進吾を呼んでみませんか。嬉しいことに最近、グループや町内会などで『天野進吾』の歴史講座の要望が増えて参りました。このSHINGO-SCOPEの郷土史が好評ですのでその現れかもしれません。どうぞ、お気軽にお声掛けください。